

# 銭形平次捕物控

笑い葺

野村胡堂

青空文庫



伽羅大尽磯屋貫兵衛の涼み船は、隅田川を漕ぎ上つて、白鬚の少し上、川幅の広いところを選つて、中流に碇をおろしました。わざと気取った小型の屋形船の中は、念入りに酒が廻つて、この時もうハチ切れそうな騒ぎです。

「さア、皆んな見てくれ、こいつは七平の一世一代だ——おりん姐さん、鳴物を頼むぜ」

笑い上戸の七平は、尻を端折ると、手拭をすつと冠りに四十男の恥も外聞もなく踊り狂うのでした。

取巻の清五郎は、芸者のお袖を相手に、引つきりなしに拳を打っております。貫兵衛の義弟で一番若い菊次郎は、それを面白いような苦々しいような、形容のしようのない顔をして眺めております。

伽羅大尽の貫兵衛は、薄菊石の醜い顔を歪めて、腹の底から一座の空気を享樂している様子でした。三十五という、脂の乗り切った男盛りを、親譲りの金がありすぎて、呉

服太物問屋の商売にも身が入らず、取巻末社を引きつれて、江戸中の盛り場を、この十年間飽きもせずに押し廻っている典型的なお大尽です。

「卯八、あの酒を持って来い」

大尽の貫兵衛が手を挙げると、

「へエ——」

爺やの卯八——その夜のお燗番——は、その頃はとびきり珍しかったギヤマンの徳利を捧げて臚から現われました。

「さて皆の衆、聴いてくれ」

貫兵衛は徳利を爺やから受取つて、物々しく見得を切ります。

「やんややんや、お大尽のお言葉だ。皆んな静かにせい」

清五郎は真つ赤な顔を挙げて、七平の踊りとおりんの三味線を止めました。

「この中には、和蘭渡りの赤酒がある。ほんの少しばかりだが、その味の良さというもの、本当にこれこそ天の美祿というものだろう。ほんの一杯ずつだが、皆んなにわけ進ぜたい。さア、年頭の七平から」

貫兵衛はそう言いながら、同じギヤマンの腰高盃を取つて、取巻の七平に差すの

でした。

「有難いッ、伽羅大尽の果報にあやかつてそれでは頂戴仕るとしましうか、——おっと散ります、散ります」

野帮間のだいこを稼業ののようにしている巴屋ともえや七平は、血のような赤酒を注つがせて、少し光沢つやのよくなつた額ひたいを、ピタピタと叩くのです。

「次は清五郎」

これは主人と同年輩ざっばいの三五六ですが、雑俳ざっばいも、小唄も、嘘八百も、仕方しかたなばなしも、音曲もいける天才的な道楽指南番で、七平に劣らず伽羅大尽に喰い下がっております。

「へエ——和蘭渡りの葡萄酒ぶどうの酒。話には聞いたが、呑むのは初めて——それでは頂戴いたします、へエ——」

美しいお蔭つたにお酌しゃくをさせて、ビードロの盃さつになみなみと注いだ赤酒、唇くちびるまで持つて行って、フト下へ置きました。

「どうした、清五郎」

少し不機嫌な声で、貫兵衛はとがめます。

「いえ、少し気になることがございます」

「なんだ」

「あれを——気が付きませんか、橋場のあたりでしょう。闇の中に尾を引いて、人魂が飛びましたよ」

「あれッ」

女三人は思わず悲鳴をあげました。

「おどかしてはいけない、たぶん四つ手駕籠の提灯かなんかだろう」

と貫兵衛。

「そんな事かもわかりません、——ああ結構なお酒でございました、——もう一杯頂戴いたしましょうか」

清五郎は綺麗に呑み干した盃を、お蔦の前に突き付けるのです。

「それはいけない、酒にも人数にも限りがある。その次は菊次郎だ」

「そうおっしゃらずにもう一杯、——頬つぺたが落ちそうですよ」

「いや、重ねてはいけない、それ」

貫兵衛が目配せすると、お蔦は清五郎の手から盃をさらって、菊次郎のところへ持って行きました。貫兵衛の義理の弟で三十前後、これは苦み走ったなかなか良い男です。

菊次郎もどうやら一杯呑みました。義兄が秘蔵の赤酒は、こんな時でもなければ口に入りそうもありません。

続いて芸者のおりんとお袖、お蔦は呑む真似だけ。大方空っぽになった徳利は、盃を添えて罍のお爛番のところに返されました。

## 二

「あ、お前は」

お爛番の卯八は飛付きました。が、その徳利を奪い取る前に、船頭の三吉さんきちは徳利の口を自分の口に当てて、少しばかり残っていた赤酒を、雫しずくも残さず呑み干してしまったのです。

「いいってことよ、今日は大役があるんだ。酒でも呑まなきや、仕事が出来るものか」

「でも、その酒を呑んじやいけないことがあったんだ。しょうがねえなア」

「ケチケチ言いなさんなよ、酒の一本や二本、なんでえ」

船頭の三吉は、お爛番の卯八の文句に取合う様子もありません。

それからの騒ぎが、どんなに悪魔的なものであつたか、たった一人素面しらふだつた、若い芸者のお蔭だけがよく知つております。

一番先に狂態を演じたのは、江崎屋えざきやの清五郎でした。

「ウ、ハツハツハツ、ハツ、ハツ、ハツ、こりや可笑おかしい、ハツハツハツ、ハツ」

腹を抱えて笑い出すと、その洞うづろな笑いが、水を渡り閘を縫つて、ケラケラケラと川面一パイに拡がつて行きました。

それをきつかけのように、しばらくの間坐つたまま、顔の筋肉をムズムズ動かしていた巴屋の七平は、物に憑つかれたように起き上がつて、筋も節もなく踊り始めたのです。

続いて菊次郎——日頃賢そうに取澄とましているのが、膳を二三枚蹴飛ばすと、湧き上がるような怪奇な手振りで、ヒヨロリ、ヒヨロリと人の間を泳ぎ廻るのです。

年増芸者のおりんは、何やらわめき散らして、狭い船の中——杯盤の間を滅茶滅茶に転げ廻りました。日頃気取つてばかりいる中年増のお袖も、訳のわからぬ事を歌い続けながら、あられもない双肌もろはだぬ脱ぎになつて、尻尾に火の付いた獣のように、船の中を飛び廻ります。

その中でも一番猛烈を極めたのは、船頭の三吉でした。口から泡を吹いて、酔眼をビー



ドロのように据えたまま、野猪のじしのように、艫みよしから舳しほへ、舳しほから艫みよしへと、乱れ騒ぐ人間を掻きわけて飛び廻ります。

鎮まり返った隅田川の夜気を乱して、船の中には、一瞬気違いじみた旋風が捲き起つたのです。洞ろな笑いと、訳の解らぬ絶叫と、滅茶滅茶にもつれ合う中を、六人の男女が狂態の限りを尽すのでした。

一番若くて、一番綺麗なお蔦は、颯たいふう風の眼のように移動する動乱の渦を避けて、お爛番の卯八の懷に飛込んだり、伽羅大尽の貫兵衛の背後うしろに隠れたりしました。船はちようど隅田川の真ん中に停つたまま、ちよつとも動く様子はありません。この動乱を避ける道は、夜の水より外にはないのですが、水心のないお蔦はさすがにそこへ飛込むほどの勇氣もなかったのでしょうか。

「旦那、どうしたんでしょう、私は、私は怖い」

日頃は醜い蝦蟇がまかなんかのように思っていた貫兵衛も、今の場合では、たった一人の救いの神でした。ほとんど素面しゆふで、艫みよしからこの狂態をジツと見詰めている貫兵衛の冷たい顔には不気味なうちにも、妙に自信らしいものがあつたのです。

「怖がることはないよ、あいつらは騒ぐことが好きなんだ、——あんなにゲラゲラ笑いな

がら、滅茶滅茶に踊り狂いながら、地獄の底まで道中するんだ」

貫兵衛の醜い顔は、悪魔的な冷笑に歪んで、六人の狂態を指した手は、激情に顫えます。  
「助けてエー、旦那様」

お蔭は思わずすがりついた袂たもとを離しました。冷静を装う貫兵衛の顔には、踊り狂う六人の顔よりも物凄いものがあつたのです。

その騒ぎの中から、船頭の三吉はヒョロヒョロと艫に戻りました。

「退どいてくれ、——俺は、大変なことを忘れていた」

片手業にお爛番の卯八をかき退けると、予かねて用意したらしい、木槌こつちを取って、船底の栓せんを横なぐりに叩くのです。

「あッ」

お爛番の卯八は後ろから、その身体を羽交はがいじ締めにしました。ここで船底の栓などを抜かれたら、船の中の九人は、ひとたまりもなく溺れ死ぬことでしょう。

「止よしてくれ、——邪魔しやがると、手前てめえのガン首から先に抜くぞ」  
いきり立つ三吉。

「頼むからそいつは止してくれ」

「何を言やがる」

振りもぎつた三吉、もういちど槌は勢いよく振りあげられます。

その争いは一瞬にして片付きました。船頭の三吉が予て仕掛けをしてあつたらしく、船底の栓が他愛もなく抜けるのと、卯八の必死の力が、荒れ狂う三吉を舩ふなぼたから川の中へ押し転がすのと、ほとんど一緒だったのです。

ドツと奔騰ほんとうする水。

「あッ」

卯八は今抜き捨てた栓を捜しましたが、咄嗟とっさの間に三吉が川の中へ抛り込んだものか、それは見当りません。自分の身体を持って行って、穴から奔注ほんちゅうする水を防ぎましたが、そんな事では、なんの役にも立たないことが、すぐ解つてしまいました。

船の中の狂乱は、一瞬ごとにその旋回度を増して、山水やまみずに空廻りする水車みずぐるまのような勢い。

「あッ、そうだ」

卯八は料理のために用意した出刃庖丁を取出すと、碇いかりづな綱をブツリと切りました。あとは、艚ろに寄つて、馴れないながら一と押し、二た押し。

水浸しになった涼み船は、それでも白鬚の方へ、少しずつ少しずつは動いて行きます。時々ドツとあがる笑い声、それも次第に納まって、乱舞も大方凪いだ頃、船は向島むこうじまの土手の下、三間ほどのところへズブズブと沈んでしまいました。

## 三

魂の抜けたように、呆然ぼうぜんとしている貫兵衛を促し、か弱いながら、一番気の確かなお蔭を手伝わせて、卯八一人の大働きで、水船から引上げた人間は四人、船頭の三吉と、野の幫間だいきの巴屋七平は、それつきり行方ゆくえ知れずになってしまいました。

近所の船頭をかり集め、松明たいまつを振り照して川筋を捜しましたが、その晩はどうとう解らず、翌あくる日の朝になって、船頭三吉と、野幫間七平の死骸は、百本杭ぐいから浅ましい姿で引上げられました。

ところで、不思議なことに、呑む、打つ、買うの三道楽に身を持崩して、借金だらけな船頭三吉の死骸からは、腹巻の奥深く秘めた百兩の小判が現われ、野幫間七平の死骸には、背後から突き刺した凄まじい傷が見付かったです。

「こんなわけだ、親分、行ってみて下さい。前代未聞の騒ぎじゃありませんか」  
 ガラツ八の八五郎は、得意の早耳で、これだけの事を聞込んで来たのでした。

「そいつは御免蒙ごめんこうむろう、向島じや縄張ちぢげ違えだ」

銭形平次は相変らず引込み思案です。

「縄張の事を言や、三輪みのわの万七親分だつて縄張違いでしよう」

「それがどうした」

「いきなり川を渡つて、現場をさんざん荒らし抜いた上、柳橋に渡つて、お蔭を挙げて行きましたぜ」

「それが見込み違えだというのか」

と平次。

「お蔭は芸者稼業こそしているが、親孝行で心掛けの良い娘だ、人を殺すか、殺さねえか、親分」

「大層腹を立ててるようだが、誰かに頼まれて来たんじやあるまいな、八」

「へエ——」

「誰だか知らないが、門かどぐち口で赤いものがチラチラするようだ、ここへ通すがいい、——

お静

「はい」

女房のお静は心得て門口へ行つた様子ですが、何やら押問答の末、モジモジする娘を一人、手を取らぬばかりに伴れて来ました。

「お前さんは？」

平次も少し面喰らいました。まだほんの十七八、身扮みなりは貧し気な木綿物ですが、この界か隈いでも、あまり見かけた事のない良い娘こです。

「ヘツヘツ、——お薦の妹ですよ、親分」

ガラツ八は不意気に五本指で小鬢こびんなどを搔かいております。

「早くそう言やいいのに、——なんと言いなさるんだ」

「お絹きぬさんてんだ、親分、——あつしの叔母さんの知合いで」

ガラツ八はまだモジモジしております。

「お絹さんと言うのかい、——一体どうしたというんだ。みんな話してみるがいい。俺の力で及ぶことなら、なんとかして上げよう」

銭形平次が、こう言うのは、全くよくよくのことでした。それだけ、このお絹という小

娘は、好感の持てる娘だったのです。

油っ気のない髪、白粉おしろいも紅も知らぬ皮膚、山のはいった赤い帯、木綿物の地味な単衣ひとえ、なに一つ取柄とりえのないようですが、そのつくるわぬ身扮につつんだ、健康そうな肉体と、内気な純情とは、どんな人にでも、訴えずにはおかなかつたでしょう。

「姉を助けて下さい、親分さん」

「一体、どうしたのだ」

「姉は——幫たいこもち間の七平を怨うらんでいました。あの人がお袖さんに頼まれて、余計な事を言い触らしたばかりに、菊次郎さんと切れてしまったんです」

「それで？」

「それで、七平を殺したのは、姉さんに違いない——って、三輪の親分が言います」

「フーム」

「それから、昨夜船ゆうべの中で、みんな気違ひみたいになつたのに、姉だけ一人、平気でいたのが怪しいんですって」

「それだけの事なら、お前の姉さんを下手人にするわけにはゆくまい。外ほかになんか手掛りがあるだろう」

三輪の万七の老ろうかい獺がさが、それだけの証拠でお蔭を縛らせるはずありません。

「姉ちゃんけがは怪我をしていたんです」

「……？」

「手首を切つて、ひどく血が出ていたんですって」

「そんな事もあるだろう、——よしよし、俺が行つて覗いてやろう。親孝行で評判の良いお蔭が、人など殺せる道理はない、——八、一緒に行つてみるか」

「へエ——」

親分を引つ張り出したのは、自分の手柄だけではなかったにしても、フェミニストの八五郎は、すっかり有頂天になつて、親分の草履など揃えております。

#### 四

「おや、銭形の」

向島で沈んだ船を見て、百本杭へ死骸を見に行った平次は、現場でハタと三輪の万七に逢つてしまいました。



「万七あにき兄哥、もう下手人の目星が付いたようだな」

「今度は間違いがねえつもりだ。女の怨みは恐ろしいな、銭形の、——磯屋の貫兵衛は江戸一番の醜ぶおとし男だが、あの弟分の菊次郎は、また苦み走ったとんだ良い男さ。お蔭はあの男に捨てられたのを七平のせいだと思ひ込んでゐるんだ」

自分の手柄てに脂下やにさがる万七に案内されて、ともかくも、引取手もなく、筵むしろを掛けたままにしてある二人の死骸を見ました。

船頭の三吉は、稼しょうばい業柄にもなく、水に落ちて死んだというだけのことですが、野幫のだ間の七平いしの死骸には、背中から突ついた傷が一つ、水に晒さらされて、凄まじい口を開いておられます。

「ヒ首あいくちや剃かみそり刀じゃねえ」

「出刃庖丁だよ、水船の中から拾つて番所に預けてある」

万七は先に立ちました。

番所へ行つてみると、船頭三吉の腹巻から百兩の小判と血脂ちあぶらの浮いた出刃庖丁と、それから、嚴重に繩を打つたままのお蔭が留め置かれております。

水船から這はい上がつて、半身ぐしよ濡れのまま縛られたのでしよう、腰からは生湿なまじめ

りのまま、折目も縫目も崩れて、筵の上にしよんぼり坐ったお蔦は、妙に平次の感傷をそそります。

妹のお絹によく似た細<sup>ほそおもて</sup>面、化粧崩れを直す由もありませんが、生れながらの美しさは、どんな汚な作りをしても、蔽<sup>おほ</sup>う由もなかったのでしょうか。うな垂れた緑の眉から、柔かい頬のあたりが霞んで、言いようもない痛々しい姿です。

「お前は左利きかい」

平次の最初の問は唐突<sup>とうとつ</sup>でした。

「いえ」

わずかに顔を挙げるお蔦。

「傷は右手首のようだが、——どうしてそんな怪我をしたんだ」

「自分の持った出刃庖丁で切ったのさ、解り切ったことじゃないか」

万七は苦々しく遮<sup>さへぎ</sup>ります。

「右手に持った出刃庖丁で、右手首を切るはずはない」

平次のそう言う言葉に力を得たものか、

「お爛番の卯八さんが、碇綱を切つて投げた庖丁が当たったんです」

お蔭は顔を挙げてはつきり言うのでした。

「本人はあんな事を言うがね」

と万七。

「だが、三輪の兄哥、若い女の手で、七平を殺した上、船頭の三吉まで水の中へは投<sup>ほう</sup>り込めないよ」

「なんの中毒か知らないが、船の中では皆んな半狂乱だったそうだよ。目の昏<sup>くら</sup>んだ人間なら、女一人の手でも、二人や三人の始末出来ないことはあるまい」

万七は頑としてお蔭に疑いを釘<sup>くぎ</sup>付けにするのでした。

「お蔭——お前はいま大変な事になっているよ、——みんな申上げてしまつちやどうだ、隠し立てをして、万一の事があると、母親や妹が、とんだ嘆きをみることになるぜ」

「親分さん、私は、私はなんにも知りません」

平次の言葉の意味が解ると、お蔭はたださめざめと泣くのです。

「船の中で正気だったのは、磯屋とお爛番の外には、お前一人だったというじゃないか。お前はなにか知ってるに違いあるまい」

「……………」

「お前の妹のお絹が、先刻俺の家へ来たよ。母親の嘆きを見ていられないから、なんとか、姉を助けてくれ——と言って」

「親分さん」

お蔭は縛られたまま、ガバと泣き伏しました。

「言うがいい、お前はなにか知っているに違いない」

「……………」

お蔭は黙って頭を振りました。

「ね、錢形の、この通りだ」

万七は我が意を得たる顔です。

## 五

「親分さん方、——磯屋の爺やが、申上げたいことがあるそうですよ」  
下っ引が一人、うさんに鼻を持って来ました。

「卯八か、呼出すつもりだった。ちょうどいい、ここへつれて来い」

「へエ——」

間もなく、下つ引に案内されて、恐る恐る膝ひざこぞう小僧を揃えたのは、昨夜のお爛番——磯屋の庭掃き卯八でした。五十六七——ちよつと見は六十以上にも見えませんが、長い間戸外生活と労働で鍛えて、鉄のように巖がんじょう乗ななところがあります。

「なんだ、卯八」

万七は事件が厄介らしくなる予感で、少しばかり苦い顔を見せました。

「お薦さんが縛られたと聞いて、びっくりして飛んで参りました。お薦さんは、始終私が旦那の側に居りました。人を殺すなんて、とんでもない」

「それじゃ、誰が七平や三吉を殺したんだ」

万七は乗出します。

「私ですよ、親分さん、——この卯八ですよ」

「何？」

「三吉を川へ抛ほうり込んだのは、この私に違いございません」

「なんだと？」

「船に仕掛けを拵こしらえて、中流で沈めにかかったのは、あの三吉でございますよ。私は船底

の栓を抜かせまいと思つて一生懸命組打をしました。が、なんといつても年のせいで、三吉を川へ抛り込んだ時は、もう栓が抜かれて、水が滝のように入っていました。仕方がないから、碇綱を切つて、滅茶滅茶に岸へ漕ぎ寄せました」

卯八の言葉は予想外でした。が、これだけ筋が立っていると、もはや疑う余地もありません。

「三吉はなんだつてそんな事をしたんだ」

平次もこの恐ろしい企ての意味は読みかねました。

「船の中の人間を皆殺しにするつもりだったかも知りません。碇綱で川の真ん中に止めた船が沈めば、あんなに酔つていちや、助かるのが不思議です」

「皆んな気違いじみた騒ぎをしていた——とお蔭も言うが、なんか変なものでも吞ませたんじゃないか」

「……………」

「土手に這い上がると、ケロリとしていたが、船の中に居る時のことは、なんにも知らないと言うぞ」

万七は畳みかけました。

「……………」

卯八は頑固に口をつぐみます。

「それじゃ、七平を殺したのは誰だ」と平次。

「それはわかりません」

「お前じゃないと言うのか」

「七平は舳みよしに居りました。私やお蔦ともさんは艦とにおりました」

「出刃はお前が抛つて、お蔦の手に当たったそうじゃないか。その出刃で七平が殺されてい  
るんだぜ」

平次はその時の情景を想像している様子です。

「……………」

「七平の側そばには誰と誰が居たんだ」

「おりんさんと、清五郎さんと、菊次郎さんと——」

「主人の貫兵衛は？」

「旦那様と、お袖さんは、私と七平さんの間に居りましたよ」

「フーム」

今度は平次が黙り込んでしまいました。

## 六

「八、昨夜船に乗っていた人間を、片っ端から調べ上げてくれ」

「へエ——」

「男も、女も、どんなつまらない事でも聞き漏らしちゃならねえ。七平と懇意なのや、七平に怨みや恩のあるのは、とりわけ大事だよ」

「そんな事ならわけはねえ」

「急ぐんだよ、八」

「へエ」

「それから磯屋の貫兵衛も、身しんしょう上しょうから女出入りまで、根こそぎ調べて来い、こいつは一番大事だ」

「心得た」



「一人で手に負えなかつたら、下つ引を二三人駆り出せ、明日の朝までだよ、八」  
平次の言葉を半分聞いて、八五郎は飛出しました。

それから半日。

「親分」

八五郎はもう帰つて来たのです。

「どうした、八」

「いろいろの事が判りましたよ」

「話してみな」

「お薦が七平の細工で、菊次郎と割かれたことは——」

「それはもう判っている」

「菊次郎はとんだ野郎で、金と女を取込むことにかけては大変な名人ですよ」

「……………」

「お薦と手を切つて、近頃はお袖に夢中になっていますよ」

「フーム」

「兄貴の磯屋の身代を、どれだけくすねたか解りやしません。近頃磯屋の身上が歪んで、

伽羅大尽の貫兵衛は首も廻らないのに、菊次郎だけは、大ホクホクだ」

「磯屋がそんなに悪いのか」

「この盆は越せまいという話ですよ。何しろ十年越しの駄々羅遊びだ。どんなに身上があつたつてたまつたものじゃない。それに、義弟の菊次郎を始め、巴屋七平、江崎屋清五郎などは、滅茶滅茶に煽おだつて費つかわせて、そのかすりを取ることはかり考えているんだ」

「清五郎と七平の暮し向きはどうだ」

「野幫間のだいこを稼業のようにしているくせに近頃は大変な景気だ。ことに清五郎なんか、地所を買つたり、家を建てたり、おりんの身請けをするという話もありますよ」

「よしよし、それでだいぶ判つたようだ。ところで、八、横山町の町役人に会つて、明日の辰刻いつく（午前八時）前、磯屋の主人貫兵衛が、御手当になるはずだ、万事抜かりのないように仕度をしておけ——とこう言つておいてくれ」

「それは、本当ですか、親分」

「本当とも、笹野ささのの旦那には、あとでそう言つておく、——こいつは大変な捕物で、抜かつちやならねえ」

「あんまり早く町役人に言つておくと、磯屋の耳に入りますよ」

「それでいいんだよ」

「へエ——」

「おツと待った、八」

「……………」

「今晚、少し仕事がある。横山町の自身番へ潜り込んで、俺の行くのを待ってくれ」

「へエ——」

八五郎は何か何やら解らずに飛んで行きます。

それから二た刻ばかり、江戸の街々もすっかり寝鎮ねしずまった頃、平次は横山町の自身番を覗きました。

「八」

「あツ、親分」

「静かについて来い」

二人はそれつきり黙りこくつて、城郭のような磯屋の裏口へ忍び寄りました。

「何をやらかすんで、親分」

「ちよいと、泥棒の真似をするんだ」

「へエ——」

「どんな事が始まってても、驚くなよ、八」

「……………」

平次の調子の物々しさに、八五郎もツイ胴ぶるいが出るのでした。

「この塀へ飛付けるだろう」

「大丈夫ですか、親分は」

「大丈夫だとも」

二人は裏口の側そばの天水桶を踏台にして、あまり苦勞もせずせに塀を乗り越えました。

「どうするんで、親分」

「シツ」

「驚いたなア」

「驚くのはこれからだよ」

磯屋の裏をグルリと一と廻り、平次は家の中へ忍び込めそうな場所を探す様子でしたが、伽羅大尽と言われた構えだけに、さすがに忍び込む場所もありません。

「親分、あれは？」

「シツ」

平次は八五郎を突き飛ばすように、あわてて物蔭に身を潜ひそめました。裏口が静かに開いて、真つ黒なものが、そろりと外へ出たのです。

「……………」

二人は呼吸いきを殺して見詰めました。

真つ黒な人間は、しばらく外の様子を見ている様子でしたが、誰も見とがめる者がないと判ると、引返して家の中から手てしよく燭を持って来ました。

磯屋の主人、伽羅大臣貫兵衛です。

貫兵衛は平次と八五郎には気が付かなかつたものか、その前を通り抜けて、物置の方へ足音を忍ばせませす。

「来い」

平次は八五郎を小手招ぎながら、静かにその後をつけました。

やがて物置から、プーンとキナ臭い匂い、パチパチと物のはぜる音。

「八、大変だ。あの火を消せ」

「おうッ」

二人が一团になって飛込むと、磯屋貫兵衛は、手燭の火を、物置の中のガラクタに移している最中だったので。

「野郎ッ」

遮しやにむに二無二飛込むガラツ八。

「あッ」

燃え草の火の中に、貫兵衛と組んだまま転がり込みました。咄嗟とつさの間に平次は、物置の側にある井戸に飛付くと、幸いそこにあつた用心水を一杯、燃え上がったばかりの焰ほのおの上へ遠慮会釈もなく、ドツと浴びせたのです。

「わッ、ブルブル」

火は消えました。が、ガラツ八と貫兵衛は、取っ組んだままズブ濡れになって、物置の口へ転がり出ます。

「なんとという馬鹿なことをするんだ。御府内の火付けは、火焙ひあぶりだぞ」

平次はそれを闇の中に迎えて叱咤しったします。

「相すみません」

相手の素姓も判りませんが、貫兵衛は威圧されて、思わず大地に崩れました。

「幸い誰も気が付かない様子だ、——酒へ毒を入れたり、物置へ火をつけたり、一体これはどうした事だ」

「……………」

「俺は神田の平次だ、話してみちやどうだ」

平次の声は威圧から哀憐あゐれんに変わってりました。

「銭形の親分——良い方に見付かりました。みんな申上げます。この私が、今晚死ななければならぬわけ——」

## 七

物置の前から奥の一と間に案内されて、平次とガラツ八は、磯屋貫兵衛の不思議な懺ざんげ悔話ぼなしに耳を傾けました。

「聴いて下さい、親分、この世の中に、私ほど幸せに生れて、私ほど不幸せになった者があつたでしょうか」

磯屋貫兵衛の話はこうでした。

貫兵衛が父の跡を継いだのは十年前、ちょうど二十五の歳、金持のお坊っちゃんに育つて、阿諛あゆと諂てんねい佞ねいに取巻かれ、人を見下してばかりきた貫兵衛は、自分の世帯になって、世の中に正面から打ぶつかった時、初めて、自分の才能、容貌、魅力——等に対する、恐ろしい幻滅を感じさせられたのです。

それまで、自分ほど賢い者は、江戸中にもあるまいと思つたのが、我わがまま儘ままな坊っちゃんわがままの言い募る言葉に屈従する人達の姿であり、自分ほど立派な男はあるまいと信じさせたのは、おべつかを忠義と心得た、卑ひきよう怯ひきような人達のお世辞を、鏡と没交渉に信じていたにすぎないことを、つくづくと思ひ当らせられる時が来たのでした。

貫兵衛は、恐ろしい失望と自棄やけに、氣違あやまちいじみた心持になりましたが、間もなく、何万両という大身代が自分の自由になつたことと、その何万両を散じさえすれば、お坊っちゃん時代の昔の夢を、苦もなく再現することの出来ることに、氣が付いたのでした。

あらゆるお世辞、——齒の浮くような阿諛を、法外な金で買つて、貫兵衛は溜りゆういん飲いんを下げました。色街の女達も、百人が九十人まで、小判をバラ撒まきさえすれば、助六のように自分を大事にしてくれます。

行くところ、煙管きせるの雨は降りました。家へ帰ると、女達の手紙を、使い屋が何十本とな



く持つて来てくれました。やがて、金の力の宏大なのに陶醉して、貫兵衛はもう一度、それが自分に備わった才能、徳望のように思い込んでしまったのです。

それから十年の間、貫兵衛はあらゆる狂態をし尽しました。女房を迎える暇もないような忙しい遊蕩——そんな出鱈目な遊びの揚句は、世間並みな最後の幕へ押し流されて来たのです。

手つ取り早く言えば、磯屋にはもう一面の金も無くなっていましたのです。家も、屋敷も、商品も、二重にも三重にも抵当に入つて、この盆には、素つ裸で抛り出されるか、首でも縊るより外に、貫兵衛の行く場所はなかつたのでした。

「そうなる、子どもは皆んな私から離れてしまいました。お蔭も、おりんも、お袖も、——それから私を十年越し喰い物にしていた遊び仲間も、蔭へ廻つて私の悪口を言うようになりました。何千両となく取込んだ義弟の菊次郎も、巴屋の七平も、江崎屋の清五郎も、私の顔を見て、近頃はもう昔のようにお世辞笑いをしなくなつたばかりでなく、わざと私に聞えるように、私の悪口をさえ言うようになったのです」

貫兵衛の話の馬鹿馬鹿しさ、ガラツ八の八五郎さえ、我慢がなり兼ねてときどき膝を叩きますが、銭形平次は世にも神妙に構えて、

「それから」

静かに次を促します。

「私は一期の思い出に皆んなを馬鹿にしてやろうと思いましたが。昔金に飽かして手に入れた、笑い茸の粉を和蘭渡りの赤酒に入れて、皆んなに一杯ずつ吞ませ、あらん限りの馬鹿な顔をさせてみるつもりだったのです」

話は次第にその晩の筋になつて来ます。

「涼み船を出して、首尾よく笑い茸の酒を吞ませ、皆んなの、あらゆる馬鹿な姿を眺めました。それがせめてもの——翌る日は死んで行く私の腹癒せだったのです。その晩帰ると、奉公人に皆んな暇を出し、この家に火をつけて、私は首でも縊るつもりでした。——それが、船を沈められたり、七平が殺されたり、あんな思いも寄らぬ騒ぎになつてしまったのです。私の死ぬのは、そのお蔭で一晩遅れました——もつとも」

「……………」

「もつとも、卯八だけは私の心持をようく知っていました。あればかりは、私におべつかも使わず、お世辞らしい事も言いませんが、こんな落目になつても、一生懸命、私を庇つてくれました。——笑い茸の企みなども、最初はたつて止めましたが、命に別条のないこ

とだからと説きふせられて、私に一世一代の溜飲を下げさせたのです」

「船を沈めさせたのは誰の指図だ」

平次はそれを知りたかつたのです。

「それは知りません。——私は自分の命さえ捨てるつもりでした。今さら嘘も偽りもありません。船頭の三吉に、船を沈めることを言い付けたのだけは、この私じゃない」

「すると？」

「第一、私にはもう、百両という小判がありませんよ」

貫兵衛はそう言つて淋しく笑うのです。三吉の死体の腹巻にあつた金の事でしょう。

## 八

「親分、驚いたね」

ガラツ八は、黙々として横山町から帰る平次に声を掛けました。磯屋貫兵衛を町役人に預けて、さてこれからどうしようもなく、家路を辿たどつていたのです。

「俺も驚いたよ。七平を殺したのは、お蔭や貫兵衛でない事は確かだ」

「三吉に言い付けて、船を沈めさせた奴じやありませんか」

「えらいッ、八、そこへなんだって気が付かなかったんだ。あの晩、赤酒を呑む振りをして呑まなかつた奴と、泳ぎのうまい奴を調べて来い、——こんどは間違いないぞ」

「そんな事ならわけはありませんや」

「どこへ行って聞くんもりだ」

「船宿を軒並叩き起して——」

「それもいいが、卯八とお蔦に聞くのが早いぜ」

「心得た」

ガラツ八は闇の中に飛びます。翌る朝ガラツ八が、その報告を持って来たのは、まだ薄暗いうちでした。

「親分、驚いたのなんの」

「どうした、八」

「あの中で泳げないのは、貫兵衛と爺やの卯八だけですよ」

「何？」

「死んだ七平なんぞと来た日にや、河童かっぱみたいなもので」

「菊次郎と清五郎は？」

「二人ともよく泳ぐそうですよ、——もつとも女どもは皆んな徳利だ、少しでも泳げそうなのは、橋場で育ったお袖ぐらいのもので」

「すると——面白いことになるぜ。七平は船が沈んでも死にそうもないから刺されたというわけだろう」

「そこですよ、親分」

ガラツ八は大きな声を出します。

「ところで、赤酒を呑まないのは、誰と誰だ」

「そいつが大笑いで、親分」

ガラツ八はクスリクスリと笑います。

「何が可笑おかしい」

「あの伽羅大尽の貧乏大尽がどこまでお目出たいか解らない」

「どうしたんだ」

「赤酒の中に、なんか仕掛けがあると知って、たった一人も呑んだ奴がないと聞いたらどうします」

「本当か、それは、八？」

この情報には、さすがの平次も驚きました。

「どうかしたら、殺された七平くらいは呑んだかも知れないが、菊次郎も清五郎も、おりんも、お袖も呑んじやいません。皆んな川に捨てたり、手拭にしめしたりしたそうで——これは最初から素面しらふだったお蔭と卯八が見届けていますが。もつとも三吉は確かに呑んだ  
そうで」

「なるほどな」

「笑い草なんて、そんなものを呑ませて、万一間違いがあつてはと、人の良い卯八がそつと菊次郎に耳打をしたんです」

「そいつは大笑いだ、——呑まない毒酒を呑んだ振りをして、六人揃つて気違い踊りと馬鹿笑いをするとはふざけたものだな、伽羅大尽の馬鹿納めには、なるほどそいつは良い狂言だ」

「ところで下手人は誰でしょう、親分」

「解っているじゃないか」

「へエ？」

「皆んなだよ」

平次は八五郎と一緒に、まず磯屋の近所に住んでいる菊次郎を襲いました。猛烈に暴れるのを縛って、続いて江崎屋の清五郎を、それから——年増芸者のおりんとお袖とを、四人数珠じゆずつな繋ぎにして、その朝のうちに送ってしまったのです。

\*

「さア判らねえ、下手人は四人ですかい、親分」

「その通りだよ。菊次郎が頭領かしらになって、この十年の間に、磯屋の身代を滅茶滅茶にし、その半分ぐらいは自分達が取込んでいるんだ」

「そいつは世間でも知っていますよ」

「いよいよ磯屋が身代限りということになると、お白洲しろすへ出るから、自分達の悪事がみんな知れる、——涼み船で笑い苺を吞ませるといふ話を卯八から聴いて、菊次郎と清五郎は、その裏をかく相談をしたんだ。船頭の三吉に百両の大金をやって、川の真ん中で船を沈めさせ、貫兵衛とお蔦と卯八を、溺れさせ、自分達だけ助かるつもりだったのが、その場に

なつて七平が不承知を言い出して、仲間割れが出来てちよつと困つたところへ、船頭の三吉は本当に毒酒を呑んで、卯八のような年寄りに川へ抛り込まれた」

「へエ——」

「卯八の抛つた出刃庖丁を拾つたのは、一番近いところにいたお袖だ。お袖の手から菊次郎が受取り、これを清五郎に渡した。清五郎がそいつで舳みよしに後ろ向きになっている七平を突き、川の中へ落したんだろう。ただ川の中へ突き落したぐらいじゃ、泳ぎのうまい七平は死なない——七平に寝返りを打たれちや菊次郎も清五郎も首が危ない」

「なある——」

「そんな事をしているうちに船は岸に着いた。人立ちがして来たから、その上の細工は出来なかつたのだろう」

そう説明されてみると疑う余地もありません。四人——七平を加えて五人でやつた細工なら、なるほど手際よく運びますでしようが、最後の際きわに、七平の裏切りと卯八の忠義で、悪者どもの企みが喰い違つてしまつたのです。

「悪い奴らじゃありませんか、親分」

「人間の屑くずだよ、——俺の立てた筋はまず間違いはあるまいと思う。このお調べは面白い



ぜ、八」

「へエ——」

「気の毒なのは磯屋の貫兵衛だ、——が、自業自得というものさ、——それよりも可哀想なのはお蔭だ」

平次はつくづくそう言うのでした。



# 青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（十）金色の処女」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年2月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第九巻」中央公論社

1939（昭和14）年8月5日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1939（昭和14）年8月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2019年3月29日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

## 笑い茸

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>